

## 青年における自己愛的性格傾向に関する研究

— 尺度の検討と友人関係との関連 —

小 塩 真 司

### I. 問題と目的

人間は誰でも、自分というものを大切に思い、存続させたいと願っているはずである。かけがえのないものとして自分を大切にし、自分を慈しむこと、これが人間の生きていくうえでの基本的条件であることは自明であろう。その意味で、誰もが「自己愛」を持っているといえる。

このような自己愛という概念は、従来主にフロイトに始まる精神分析において様々な考察がなされてきた。さらに近年、自己愛は社会論・文化論あるいは青年論の中で注目されてきている概念でもある。一方、Raskin & Hall (1979) が DSM-III (1980) における自己愛パーソナリティ障害の記述をもとにして、パーソナリティ障害の診断のためというよりもむしろ自己愛的な特性を個人がどのくらい持っているのかを測定するために Narcissistic Personality Inventory (自己愛人格目録; NPI) を開発して後には、性格心理学、社会心理学、青年心理学の枠組みで自己愛を捉えようとする試みが行われるようになってきている。しかし、自己愛は青年期のパーソナリティを考える上で見落とすことのできない概念の一つであるにも関わらず、そのような立場に立った調査研究はいまだに数が少ないというのが現状である。

本研究の最終的な目的は、自己愛が青年期のパーソナリティにおいてどのような機能や役割を果たしているのかを探求することである。しかし先行研究を概観すると、自己愛の尺度としての NPI にはいくつかの妥当性の問題が残されているように思われる。そこで本研究では、まず NPI をめぐりいくつかの疑問に何らかの回答を与え、その後、青年心理学における主要なトピックの一つである友人関係に焦点を当て、自己愛との関わりを検討していくこととする。

### II. 研究1

＜目的＞NPI に関して因子分析による因子構造の検討を行う。そして、男女、学校、年齢などの人口統計学的変数との関連を検討する。

＜方法＞研究2から研究4における調査によって得られた、大石ら(1987)によって訳出された NPI 計54項目(5件法)のデータを用いて分析を行った。内訳は、愛知県・岐阜県の大学・短大・専門学校生562名(男子269

名、女子286名、不明7名)であった。

＜結果と考察＞NPI に関する項目分析と因子分析の結果、最終的に37項目から3つの因子が得られた。第1因子「優越感・有能感」は18項目からなり、自分が才能に恵まれており、他者よりも優れており有能であるといった内容からなる。第2因子「注目・賞賛欲求」は12項目からなり、他者に注目されたり賞賛されることを期待する項目からなっている。第3因子「自己主張性」は7項目からなり、自らの意見をはっきりと言い、やや自己中心的な内容の項目群からなる。各得点の $\alpha$ 係数は.76～.91と十分な値を示した。この3つの因子の内容を検討すると、DSM-IIIやDSM-IVにおける自己愛パーソナリティの記述を網羅しており、NPIは内容的には妥当な尺度であると判断される。また、男女別で因子分析を行った場合でもほぼ同様の因子構造が見られたことから、この3因子は男女共通の因子であるといえよう。

学校群(3)×性別(2)の分散分析の結果、「優越感・有能感」は学校の主効果が有意(専門学校<大学)であり、「注目・賞賛欲求」は交互作用が有意であった。このことから、NPIで測定される自己愛傾向を解釈していく際には、性別のみではなく社会的環境の影響を視野に入れる必要性があることが示唆される。

### III. 研究2

＜目的＞NPIはその内容から自尊感情との関連が予想されるが、日本においてその点に着目した調査研究は行われていない。また、NPIと社会的望ましさととの関係は、先行研究においては一貫した結果が得られていない。そこで、この3つの尺度間の関連を検討する。

＜方法＞①被調査者：愛知県内の大学・短大・専門学校生192名(男子80名、女子110名、不明2名)。②質問紙：1. NPI；54項目、5件法により測定。2. 自尊感情尺度；Rosenberg(1965；星野, 1970)の自尊感情スケール日本語版(10項目)とCheek & Buss(1981；大淵ら, 1991)の自尊感情尺度(6項目)を組み合わせ、二件法で回答させた。3. 社会的望ましき尺度；MMPI(日本MMPI研究会, 1969)のL尺度、K尺度を用いた。

＜結果と考察＞自尊感情尺度の因子分析の結果、肯定的な項目群からなる「積極的自尊感情(SA)」と否定的な項目群からなる「消極的自尊感情(SP)」が得られた。

そして、NPIは総じてSP得点よりもSA得点と高い正の相関を示し、一方、L尺度やK尺度はSA得点よりもSP得点と高い正の相関を示した。また、NPIのうち「注目・賞賛欲求」はL・Kともに負の有意な相関を示した。遠藤(1992)の述べるように、SA得点が自尊感情の完全性や優越性の側面を意味するのであれば、SA得点と自己愛傾向がより高い正の相関を示すという本研究の結果は、NPIの妥当性を確認する一つの結果であるといえよう。

#### IV. 研究3

＜目的＞自己愛、自尊感情、社会的望ましさの3つの変数の関連を再検討するとともに、これらがどのようなパーソナリティ要因と関係しているのかを検討する。

＜方法＞①被調査者：愛知県・岐阜県の短大生・専門学校生を中心とした105名(男子43名、女子57名、不明5名)。②質問紙：1. NPI; 54項目、5件法。2. 自尊感情尺度; 研究2と同様。3. 社会的望ましさ尺度; L尺度(15項目)とCrowne & Marlowe(1960)のSocial Desirability Scale(以下MCSD; 33項目)を用いた。ともに三件法で回答させた。4. パーソナリティ特性尺度; EPPSの15の性格特性より、「異性愛」を除く14の特性を表す項目(各9項目、計126項目)を使用した。なお、本来のEPPSの使用法とは異なり、5件法で回答させた。

＜結果と考察＞自己愛、自尊感情、社会的望ましさに関しては、異なる被調査者においても研究2とほぼ同様の関係が確認された。また、NPIとEPPSの項目で測定されるパーソナリティ特性との関連から、自己愛傾向の高い者ほど「達成」「顕示」「自律」「支配」の欲求を強く持つことが示唆された。

#### V. 研究4

＜目的＞自己愛、自尊感情、社会的望ましさと同時に現実にもどのような対人関係を営んでいるのかを調査し、その相互の関係を検討する。

＜方法＞①被調査者：愛知県内の大学生・専門学校生265名(男子146名、女子119名)。②質問紙：1. NPI; 54項目、5件法。2. 自尊感情尺度(SE-I); 遠藤ら(1974)の項目を二件法で回答できるように修正して使用した。3. 社会的望ましさ尺度; MCSD(33項目)を二件法で用いた。4. 友人関係尺度; 岡田(1993)を参考に、友人との関わり方を記述した27項目を用い、「普段友達とどのようなつきあい方をしているか」を4件法で尋ねた。

＜結果と考察＞NPIとSE-Iの間には有意な正の相関が見られた。しかし、その下位尺度どうしの関連を検討すると、特にNPIのうち「注目・賞賛欲求」は他の下

位尺度とは異なり、非常に強い自己肯定感を持つ一方で、社会的な場面では他者の評価を気にし、不安を感じるといった特徴を持つことが示唆された。

また、友人関係尺度を二次因子分析することにより、「広さ-狭さ」「浅さ-深さ」という二つの次元から友人関係のあり方を四類型した。そして、総じて広い友人関係を営むことと自己愛傾向が関連しており、深い友人関係を営むことと自尊感情とが関連していることが明らかになった。さらに詳細に検討すると、この友人関係のあり方と自己愛傾向、自尊感情との関わりは以下のようになる。

「A：広く浅いつきあい方」をする者は、自己愛傾向、特に「優越感・有能感」と「注目・賞賛欲求」が強く、自尊感情は総じて低い傾向がみられる。「B：広く浅いつきあい方」をする者は、自己愛傾向のうち特に自己主張傾向が強く、かつ特に社会的な不安を感じないという意味での高い自尊感情を持つ傾向にある。「C：狭く浅いつきあい方」をする者は、低い自己愛傾向、低い自尊感情によって特徴づけられている。また、特に社会的な不安を強く抱いている者達でもある。「D：狭く深いつきあい方」をする者は、低い自己愛傾向と高い自尊感情をもつ傾向にある。

青年期の友人関係の発達とは従来、「広く浅い」あり方から「狭く深い」あり方に変化していくといわれている。本研究の結果は、そのような友人関係のあり方の発達変化と、自己愛から自尊感情へという心理的な変化とが密接に結びついていることを示唆しているとも言えよう。

#### VI. 総合的考察と今後の課題

研究1から研究3にかけて、NPIの妥当性が再確認された。しかし、NPIと社会的望ましさを意味する各変数との関係、特に「注目・賞賛欲求」と社会的望ましさの各変数が一貫して負の相関関係にある点に関しては、更なる検討の余地が残されている。また、NPIと他の心理学的な変数との関連についても、さらに調査検討が行われる必要があるだろう。

研究4では友人関係と自己愛、自尊感情との関わりが検討された。本研究で得られた結果は、青年期の発達という点で重要な示唆を与えると同時に、近年指摘されている青年の友人関係の希薄化と自己愛傾向とが相互に関連することを示唆しているという点で興味深いものであるといえよう。今後、より広い年齢範囲を対象に自己愛傾向を測定することにより、自己愛そのものがどのような発達の变化を見せるのか、そして他の行動、特性とどのように関わっていくのかを引き続き研究していくことは重要な意味を持つと考えている。